

2-2. 歴史・伝統・文化

(1) 沖縄県の歴史と普天間飛行場に関する出来事

○15世紀初頭、宜野湾、神山、新城の3集落の形成が始まった。
 ○1660年にかけて宜野湾街道(宿道)へ松が植栽された。
 ○1932年に「宜野湾街道ノ松並木」が国天然記念物に指定された。
 ○1945年6月、米軍が普天間飛行場を建設し、このために宜野湾、神山、新城、中原の各行政区を含めた広い範囲が接収された。また宜野湾街道も接収地に含まれ、街道沿いの松並木が伐採された。

■普天間飛行場に関する歴史的経緯

時代区分 (日本)	時代区分 (沖縄)	沖縄に関する出来事	普天間飛行場に関する出来事
原始・古代	縄文時代 弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代	先史 沖縄 (貝塚時代)	
中世	鎌倉時代 古琉球	古琉球	
南北朝時代 室町時代 (戦国時代) 安土桃山時代	第一尚氏王朝 ←1429 第二尚氏王朝 (前期) ←1470	<ul style="list-style-type: none"> 本格的な農耕社会の成立 →集落が海岸部から台地へ 	
近世	江戸時代 近世琉球	<ul style="list-style-type: none"> 三山が統一され、海外交易により繁栄する 明から初の冊封使が来琉、シヤム船が来琉し交易(1402) ジャワ(1430)、マラッカ(1456)と通交する 海外交易による繁栄(万国津梁の鐘の跡造←1458) シヤムへの最後の貿易船を派遣。以後南海貿易途絶する(1570) 宿道の整備(首里王府と各間切結ぶ幹線道路) タイや福建などから蒸留酒の製法が伝わり、泡盛の製造始まる(1400年代後半) 祭祀信仰一体の集落形成 →御嶺(腰当森(クハムイ)、拜所)、井泉(カ) 風水が中国より伝わる 薩摩(島津)侵攻←1609 →唐芋(サトイモ)の普及や黒糖の製造技術確立 蔡温(1682-1762) →河川改修や山林保護による農業改革 	<ul style="list-style-type: none"> 宜野湾、神山、新城の3集落はこの頃から形成が始まる
現代	昭和 沖縄		
近世	近世琉球		



■琉球王国の交易

資料：第一学習社 (H14)、「新編日本史図表」

時代区分 (日本)	時代区分 (沖縄)	沖縄に関する出来事	普天間飛行場に関する出来事
近世 江戸時代	近世琉球 第二尚氏王朝 (後期)	<ul style="list-style-type: none"> 風水集落の形成 →土着の祭祀信仰と風水の考え方が融合し、沖縄の自然環境に適した独特な集落景観を形成(抱護と呼ばれる林帯や腰当森(クハムイ)) 屋敷林が発達 →台風や冬の冷たい季節風から生活空間を守るため この頃に形成された集落は地割制度による意匠目状の形態を持つ ペリー来琉。1853年から5回に渡って那覇に来航し、中城城の測量などを実施 琉球処分 	<ul style="list-style-type: none"> 宜野湾街道(宿道)への松の植栽←1660-1706 宜野湾間切が新設される←1671(宜野湾村に間切番所設置) 新集落(屋取(ヤドクイ))の形成 →中原、上原、赤道、佐真下
近代	近代沖縄 琉球藩 ←1872 沖縄県 ←1879 沖縄戦	<ul style="list-style-type: none"> 腰当森(クハムイ)や屋敷林の消失が進行 →戦災や基地接収による土地の改変 米軍「普天間飛行場」を建設←1945.6 腰当森(クハムイ)や屋敷林の消失が進行 →戦災や基地接収による土地の改変 米軍沖縄本島上陸 ←1945.4.1 腰当森(クハムイ)や屋敷林の消失が進行 →戦災や基地接収による土地の改変 	<ul style="list-style-type: none"> 「宜野湾街道ノ松並木」が国指定天然記念物になる←1932 宜野湾村、制圧される ←1945.4.下旬(嘉数高地は激戦となる) 米軍「普天間飛行場」を建設←1945.6 宜野湾街道も接収地に含まれ松並木は伐採される(沖縄戦前に日本軍による伐採もあり) 普天間飛行場の管轄は、陸軍、空軍(1957)、海兵隊(1960)の順に移管 普天間飛行場周辺への市街地の形成 普天間飛行場内の施設外区域では、御嶺(腰当森(クハムイ))、拜所や集落跡を残したまま緑地化が進行 普天間飛行場は日本国による在日米軍への提供施設となる 普天間飛行場周辺における過密な市街地の形成
現代	昭和 沖縄		
平成	本士復帰 ←1972		<ul style="list-style-type: none"> SACO 最終報告による返還合意←1996 SCCによる返還合意 ←2006.5 →嘉手納より南の米軍施設の大規模返還の合意。但し、海兵隊の一部がアム移転、普天間飛行場代替施設への移転等とのツケージ。

◀E▶屋取集落
首里や那覇の士族層が生活の糧や職を求めて地方へ移り住み、形成された集落。

(2) 琉球王国の交易と「万国津梁」

- 沖縄本島は東シナ海と太平洋を分かち、海洋の直中であって那覇市からの距離で言えば福岡よりも台北、東京よりも上海、香港やマニラの方が近い位置にある。
- 15～16 世紀中ごろ、琉球王朝は立地を活かして中国、朝鮮、日本、南方諸国や東南アジアを結ぶ中継貿易を活発に行ない、繁栄を誇っていた。
- この頃の琉球王国の様子を表すものとして 1458 年に尚泰久王が鑄造させ、首里城正殿に掲げていたという鐘が知られている。この鐘の銘文は「(略) 船を以て万国の津梁となし」と当時の交易国家の様子を述べており、「万国津梁の鐘」と呼ばれている。

こうした事実から、
「沖縄 21 世紀ビジョン」では
次のように整理している

■ 沖縄 21 世紀ビジョン（平成 22 年 3 月）

- 3 目指すべき将来像
(4) 「世界に開かれた交流と共生の島」
② 将来像実現に向けて重視すべき要素
(本編 P 19)

○ 沖縄の人々は、琉球王国の時代から日本、中国、東南アジアの架け橋として栄えており、「万国津梁」の精神で、中継貿易を通じて東アジアの中心として“平和的共存共栄の世界”を実現してきた。

- 4 将来像実現に向けた推進戦略
(3) 「希望と活力にあふれる豊かな島」推進戦略
1) 21 世紀の「万国津梁」形成
(本編 P 26)

○ 東アジアの中心に位置する優位性を活かし、日本本土とアジア・太平洋地域、欧米州等との ヒト・モノ・情報・文化等の交流を促進し、沖縄の持続的発展を図る。このため、情報通信、基盤、空港・港湾の整備や機能拡充を進めるとともに、国内・国際交通ネットワークの新たな展開にコスト低減を図る。

○ 沖縄がアジアの経済発展の恩恵を享受し、かつアジアの発展に寄与できる「互恵」の理念にもとづく「アジア・ゲートウェイ」を早期に実現し、相互の発展を加速する。

■ 首里城に展示されている万国津梁の鐘（複製）



写真：首里城公園 HP

< 鐘銘原文 >

琉球国者南海勝地而 鍾三韓之秀以大明為
輔車以日域為唇齒在 此二中間湧出之蓬萊
島也以舟楫為万国之 津梁異産至宝充滿十
方利地靈人物遠弱和夏之仁風

< 書き下し文 >

琉球国は南海の勝地にして 三韓の秀を鍾め、大明を以て輔車となし、日域を以て唇齒となして、此の二つの中間にありて湧出せる蓬萊島なり舟楫を以て万国の津梁となし、異産至宝は十方利に充滿し、地靈人物は遠く和夏の仁風を扇ぐ。

< 大意 >

琉球国は南海の優れた土地で、三韓（朝鮮）の優れた文物を集め、大明（中国）を以て輔車となし、日域（日本）を以て唇齒となす（輔車・唇齒はともに非常に深い関係を意味する）。

これら二つの国の間に湧き出した蓬萊島（仙人が住む不老不死の理想郷）であり、舟と舵を以て世界の架け橋とし、異国の物産や財宝はあらゆる場所に満ちている。

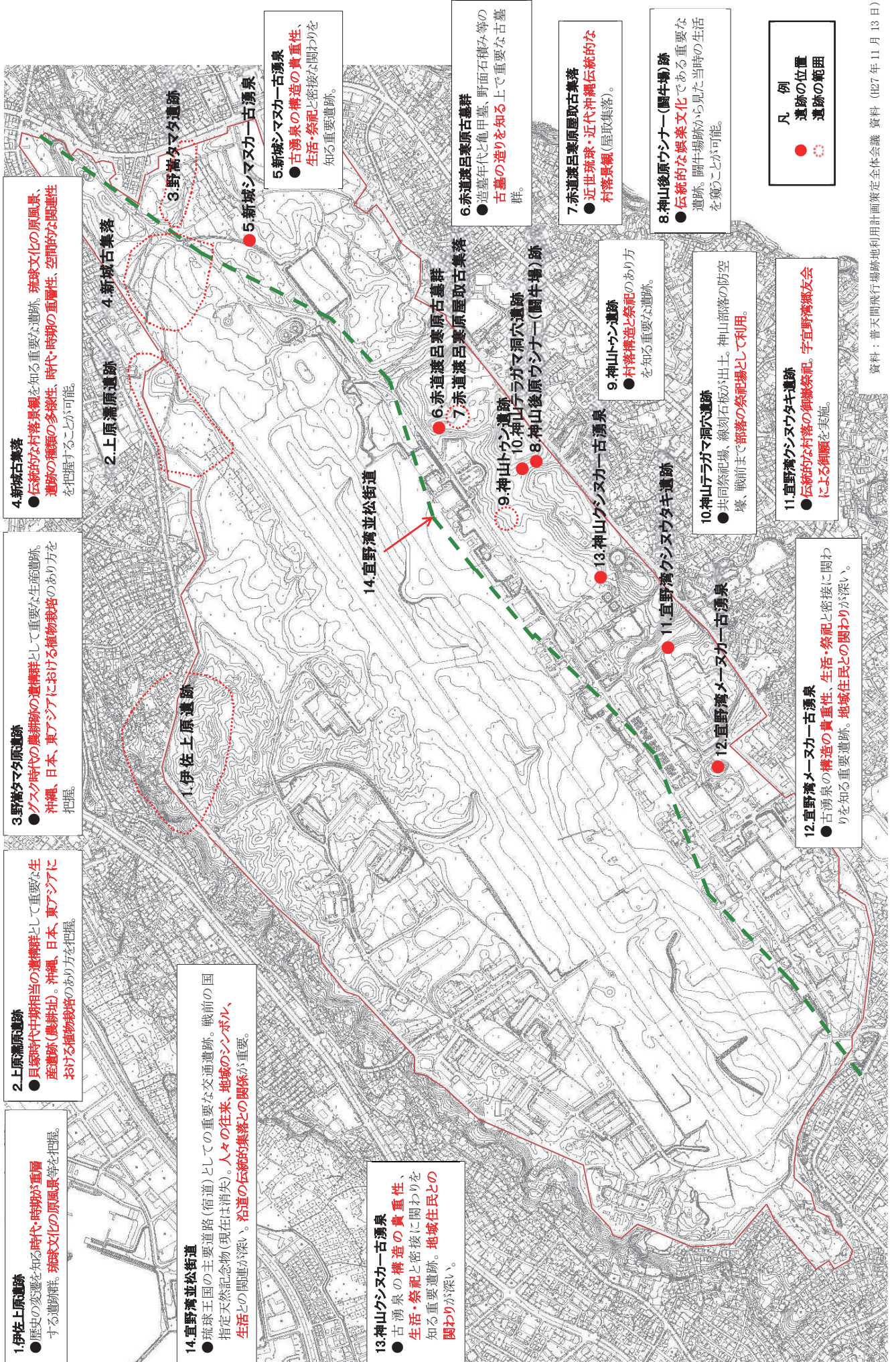
土地は豊かにして人々は繁栄し、遠く日本・中国の仁風（学問文化や人徳美風）をふるいおこす。

資料：原文と書き下し文は沖縄県 HP より、大意は『沖縄県風土記』より真栄平房昭解説



■ 沖縄から東～東南アジアの主要都市への距離

(3) 普天間飛行場内に残る重要遺跡の分布と分類



資料：普天間飛行場跡地利用計画策定全体会議 資料（H27年11月13日）

1. 複合遺跡

○遺跡の種類が多様性、時代・時期の重層性、空間的な関連性が極めて高く、周辺の地域住民の土地利用のあり方と移り変わりを明らかにできる。
 ○信仰の対象となっている祭祀遺跡、村落構造と祭祀のあり方と移り変わりを知らることができる。
 ○現在でも行事等の対象となり、旧集落、自野湾市にとって重要な遺跡である。

<対象遺跡>

- 1.伊佐上原遺跡群、11.自野湾クシヌウタキ遺跡、9.神山トウン遺跡、10.神山テラガマ洞穴遺跡



自野湾クシヌウタキ遺跡

2. 古集落

○近代沖縄の伝統的な村落の在り方を正しく理解する上で欠くことのできない遺跡である。
 ○沖縄の伝統的な民家の基本的な施設の構成（母屋、台所、離れ屋、豚小屋兼便所、井戸、屋敷林など）を確認することができる重要な遺跡である。

<対象遺跡>

- 4.新城古集落、7.赤道渡呂寒原屋取古集落



赤道渡呂寒原屋取古集落

3. 古湧泉

○ウリカー（降り泉）様式、陥没ドリネ（すり鉢状の凹地）、横穴洞穴に形成されているなど、多様な構造体、位置などを確認することができる。
 ○生活用水と村落祭祀のあり方を知る重要な遺跡である。

<対象遺跡>

- 5.新城シマヌカー古湧泉、12.自野湾メーヌカー古湧泉、13.神山クシヌカー古湧泉



自野湾メーヌカー古湧泉

4. 古墓群

○琉球文化特有の亀甲墓が連続して形成されている。
 ○さらに、県内で近世琉球の地域社会における亀甲墓の受容年代と墓造りの移り変わりを知らることができる重要な遺跡である。

<対象遺跡>

- 6.赤道渡呂寒原古墓群



5. 生産跡

○グスク時代の農耕跡が県内で初めて確認された遺跡である。
 ○沖縄のみならず、日本・東アジアにおける植物栽培のあり方と移り変わりを知らる上で重要な遺跡である。

<対象遺跡>

- 2.上原濡原遺跡
- 3.野嵩タマタ原遺跡



上原濡原遺構

6. 闘牛場

○沖縄の伝統的な娯楽文化である戦前の闘牛場跡が県内で唯一残された重要な遺跡である。

<対象遺跡>

- 8.神山後原ウシナー跡



7. 宿道

○近世琉球から戦前まで、地域の人々の暮らしと地域住民のアイデンティティの拠り所。

○近世琉球から戦前までの伝統的な集落や湧泉・御嶽等の村落景観は、「琉球文化」を育んだ原風景を想起させる重要な遺跡である。

<対象遺跡>

- 14.自野湾並松街道

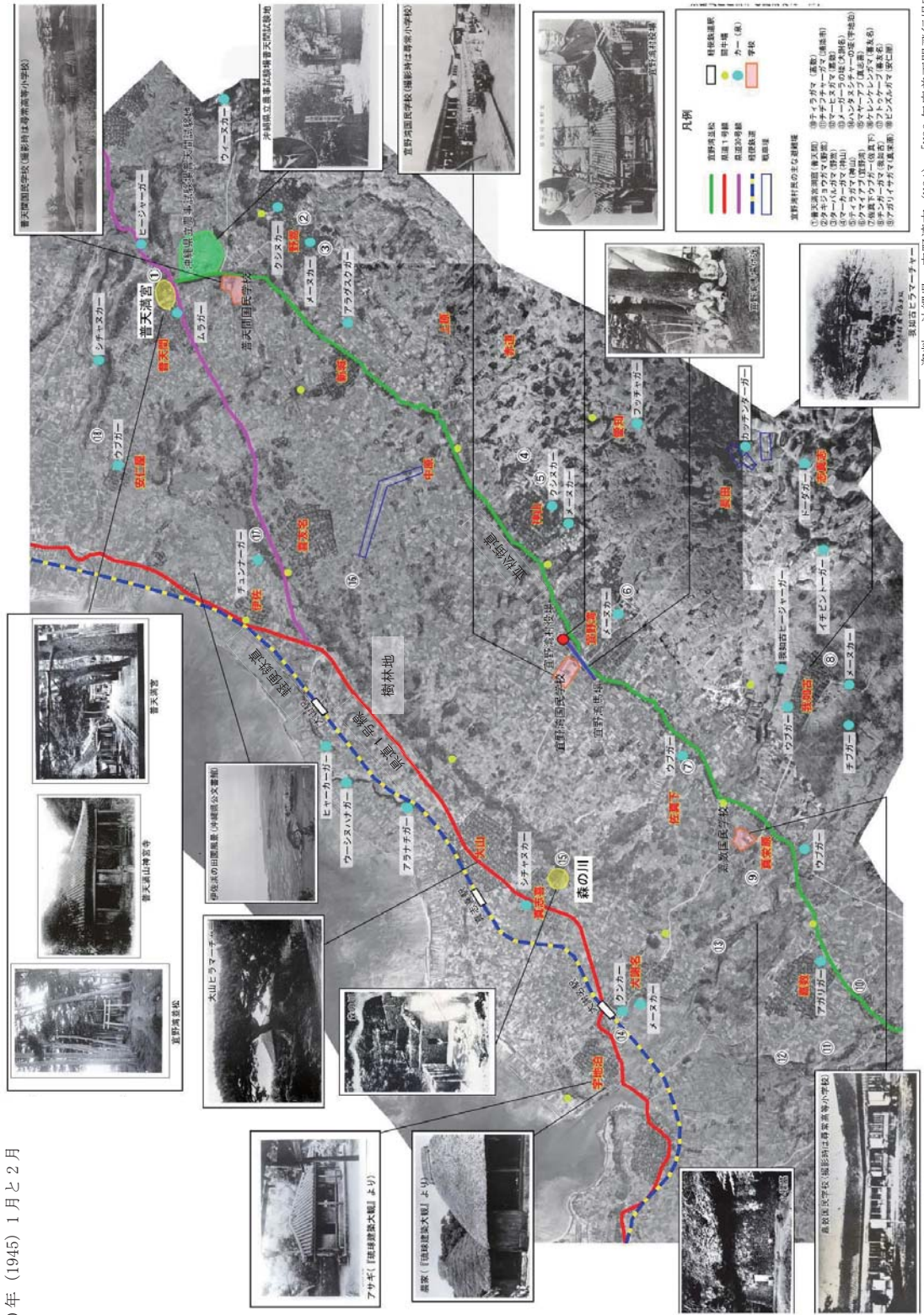


(4) 基地接収と周辺土地利用の変遷

① 戦前の宜野湾の様子

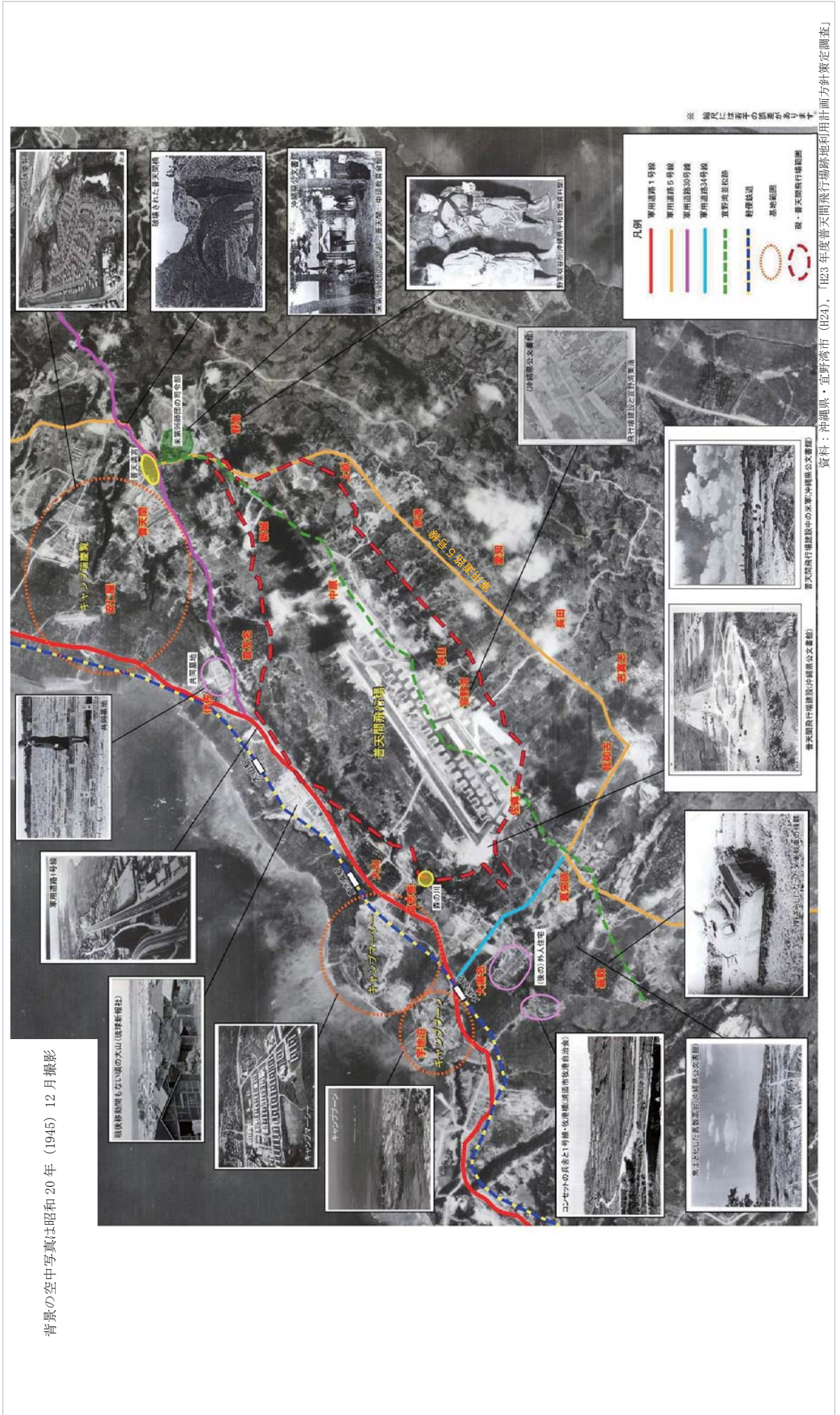
- 首里城と普天満宮を結ぶ宜野湾並松街道が通り、西海岸にはこれと並行する形で、当時の県道1号線や軽便鉄道が通っていた。
- 土地利用としては大半がサトウキビやサツマイモ畑として利用されていたが、丘陵台地部の北西側崖壁には樹林地が連続していた。
- 宜野湾や神山、喜友名などの集落が立地し、これらは比較的大規模で格子状に形成された緑の多い集落であり、宜野湾集落の並松街道沿いには役場や学校などもあった。

背景の空中写真は昭和20年（1945）1月と2月に撮影された写真を合成



資料：沖縄県・宜野湾市（H24）、「H23年度普天間飛行場跡地利用計画方針策定調査」

- ② 戦中～戦後初期の宜野湾の様子
- 本島中部地域の要衝として日本軍の陣地が築かれたが、周辺集落も甚大な被害を受けたが、天然の壕に避難して難を逃れた人もいた。
- 日本軍の撤退後、米軍の支配下のもと**戦時中から民有地の強制接収が進み、普天間飛行場の整備が着手され、短期間に2,400mの滑走路が開かれた。**
- 基地として接収された区域の東側に、現在の国道330号にあたる軍用道路5号線が整備された。



③ 昭和52年(1977)の宜野湾の様子

- 戦後10年にあたる昭和30年(1955)には、普天間飛行場の北に位置する伊佐浜一帯(現・普天間市伊佐、安仁屋、喜友名、新城)で新たな基地づくりのための大規模な土地接収が行われた。戦禍を免れた美田が広がる70haほどの土地が、**一方的な米軍の通告の後、これに抗議する人々を武装兵とブルドーザーで排除して接収された。**
- 普天間飛行場でも現在とほぼ同じ区域が基地に設定され、滑走路の延長(2,700m)や関連施設の整備が進んだ。
- その後、国道58号に近い区域(普天間飛行場の北・西など)は市街化が進展した。**一方で、飛行場内の滑走路北側・東側では樹林地の回復が進んだ(下図の白丸印付近)。



背景の空中写真は昭和52年(1977)月撮影

資料：宜野湾市提供の空中写真を用いて作成

④ 現在（平成）の宜野湾の様子

- 普天間飛行場内では、昭和52年と比べて大きな変化はみられない。
- 基地の外を見ると、地域の中央部を基地に占有されることで、普天間飛行場周辺では過密な市街地の形成が進んだ。昭和52年と比べても、基地の南側隣接地で緑が減少している様子が見取れる。
- 基地としての接収の歴史は、こうした土地利用等の変化にとどまらず、生活様式にも大きな影響を及ぼしており、集落ごとに行われてきた伝統行事や芸能の衰退などの要因ともなっている。

